

先週私たちは、パウロが自分を殺そうとしたユダヤ人たちに対して、弁明するのを見ました。彼はその中で、以前の自分が、彼らと同様、先祖の神と律法とに非常に熱心であったこと、それゆえに、「この道」としてのナザレのイエスと彼に従う者たちを迫害した、というのです。けれども、そんな者に、主が天からのまばゆい光と御声をもって現れて下さることで、それまでとは全く反対の人、つまり、福音の使者へと彼は変えられました。そして、それは実に主の一方的な選びとあわれみによったのです。

主イエスをして、パウロをそのように選ばれた理由、それがすべての人に対して、彼の見たこと、聞いたことを証することであるのを知ったパウロは、それ以来、主にすべてをささげて従います。そして、この時のエルサレム訪問に至るまで、彼は、キリキヤやシリヤを始め、ヨーロッパや小アジアの至る所で、主イエスのことを証し続けるのです。私たちは、その彼の働きを通して、どれほどの実が、異邦人たち、またユダヤ人たちの中で結ばれてきたかをこれまで見て来ました。

主が証される場所では、当然、信じる者が起こされることを私たちは期待します。それは刈り入れを期待して、農夫が種を蒔くようなものです。ですから、初めから収穫がないとわかっていたら、そこに種を蒔く理由は見出せません。ところが、この時、パウロの弁明を聞いた人々は、彼が異邦人たちの救いについて、つまり、主が彼を異邦人に遣わす、と言った時点で、その怒りを爆発させます。22-23節「人々は、彼の話をごここまで聞いていたが、このとき声を張り上げて、『こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない』と言った。23 そして、人々がわめき立て、着物を放り投げ、ちりを空中にまき散らすので…」。

残念ながら、群衆は、主イエスについてのパウロの証を受け入れません。ただ受け入れないだけでなく、パウロを殺すべきだと彼らは判断するのです。着物を放り投げた、というのは実にそのために、彼らはパウロを石で打つために上着を脱ぎ捨てました。それはちょうどステパノの石打ちの時に、パウロが人々の上着の番をしていた時のようです。このような人々の応答は、実に残念ですが、でも救われてまだ数年後くらいに、パウロがエルサレムに戻り、そこで主を証した時も、実は人々の応答は同じものでした。つまり、彼らはその時もパウロを殺そうとしたのです。

でも、その最初の時は、主は「急いでエルサレムを離れるように」とパウロに語られました。そして今回は、彼をなわめと苦しみの待つエルサレムへと導かれたのです。なぜですか？以前のよう、人々の応答は、この時も主の証を受け入れない、というものでした。主はそのことを知らなかったのか？今回に限っては、主にも人々の反応が予想できなかったのでしょうか？いいえ。間違いなく、主はご存知でした。すべてをご存知の上で、主はあえてパウロをエルサレムへと導かれたのです。それは実に彼を通して、このエルサレムでご自身の御名が証されることが、その目的そのものだったからです。

以前の箇所にもありましたし、また後日見る所でもそうですが、主はパウロに現れて、語り続けるよう、つまり、証し続けるようにと語られます。ですから、主が彼をエルサレムに導かれたのは、明らかに主を証するためでした。では、この時のように、証をしても、誰もそれを受け入れない場合はどうでしょうか？皆さん、あなたは証をする際に、どの時点で、また何をもってそれが上手くいったとか、そうでなかったと判断しますか？証を聞いた人が、その場で「信じます」と言ったら良い証で、そうでなければ悪い証だと言われますか？私たちが信仰をもって主を証をする時、そこには主が用いられるものと、そうでないものが果たして存在するのでしょうか？

パウロ自身の回心について考えてみたいと思います。彼が主の御名を呼んで救いにあずかったのは、ダマスコ途上での主との出会いと、そして、その後、アナニヤを通して導かれることによってでしたが、では彼がまだ主を信じる前、つまり、ステパノが石で打たれて殉教の死を遂げた時に、そこでなされた証は、パウロの救いに何の影響も及ぼさなかったのでしょうか？パウロ自身は意識していなくても、またその時は、全く何の影響もなかったかに思えても、主はパウロだけでなく、そこにいたすべての人々に対してそれを大いに用いられたと私は思います。前回の所で、ステパノの殉教の際に、パウロが「自分は人々の上着の見張りをしていた」と主に対して言っているのも、その証が彼の心に強い印象を残していたからだと思うのです。

ここでのパウロの弁明、その証に対する人々の応答を見ると、それが効果的だったとは言い難いのは事実です。この群衆の中から、どれだけの人が、後に主を信じるようになったかもわかりません。でもボトムラインは、主を証する、ということです。その結果は私たちにはコントロールできません。私たちには、人の心を変えることはできないのです。それができるのは、主イエスと福音の力だけです。主が、弟子たちに聖霊を約束し、ペンテコステの日に、実際に彼らに聖霊を注がれたのは、また今日も主を信じるすべての者に、主が聖霊を与えて下さるのは、私たちがその力によって、いつでもどこでも主を証する者となるためです。

ただこの時のパウロとしては、この弁明によって、群衆がいよいよ怒りをぶちまけたので、さらに危険な状況へと追い込まれてしまいます。というのも、彼が人々にへブル語で語ったため、おそらくその内容を理解できなかった千人隊長が、今度は、パウロをむち打って取り調べようとしたからです。ちなみに、このローマのむち打ちとは、その先に金具が付けられていたといわれます。そのため、このむち打ちによって、死んでしまう犯罪者も少なくなかったようです。ですから、この時のパウロも、ここでいのちを落としていてもおかしくありませんでした。

ところが、25-28節「彼らがむちを当てるためにパウロを縛ったとき、パウロはそばに立っている百人隊長に言った。『ローマ市民である者を、裁判にもかけずに、むち打ってよいのですか。』26 これを聞いた百人隊長は、千人隊長のところに行って報告し、『どうなさいますか。あの人はローマ人です』とやった。27 千人隊長はパウロのところに来て、『あなたはローマ市民なのか、私に言ってくれ』とやった。パウロは『そうです』とやった。28 すると、千人隊長は、『私はたくさんの金を出して、この市民権を買ったのだ』とやった。そこでパウロは、『私は生まれながらの市民です』とやった」。

当時（クラウデオの時代）、ローマ市民権は、多額のお金によって買うことができたようです。ですから、この千人隊長も、自分はお金でそれを買ったと言っています。でも、パウロは、「生まれながらの市民」ですから、彼が生まれる前に、彼の父あるいは祖父が、何らかの理由で市民権を取得していたのでしょう。ちなみに、ローマ市民に対する誤った訴えは、死にも値したと言われます。ですから、パウロがローマ市民であると知った兵士たちが、すぐさま彼から身を引いたのはそのためです。そして、千人隊長もまた、彼を鎖につないでいたので、恐れます。下手すると、彼のキャリアだけでなく、命までも失うことを意味したからです。

パウロは、このようにして、恐ろしいむち打ちから逃れます。ただ、それで事がすべて済んだわけではなく、パウロ自身が「ローマ市民である者を、裁判にもかけずに、むち打ってよいのですか」と言ったように、この後、彼には裁判が待っていました。そして、その結果次第では、むち打ちや他の刑罰を受ける可能性もあったのです。そこで千人隊長は、なぜパウロがユダヤ人に告訴されたのかを確かめようと思い、翌日、祭司長たちと全議会の招集を命じます。そして、彼をその前に立たせるのです。

また次週見ますが、この全議会とは、サンヘドリンと言って、ユダヤ民族の内政をつかさどる機関、つまり、最高法廷のことです。ですから、もしユダヤ人であるなら、誰も敵に回したくない相手と言えるでしょう。以前パウロは、教会を迫害する際に、彼らのサポートを受けていましたが、この時は、彼らにさばかれる立場として、その場に立っていました。このことは彼の立場を考えるなら、決して小さなこととは思えません。主イエスは、彼らによって十字架刑へと追いやられたからです。ですから、いくらパウロが、なわめと苦しみを承知の上であったとはいえ、このような中に置かれることは、大きなチャレンジであったに違いありません。

もし、そこでパウロが自分自身のこと、つまり、自分の身の安全や将来のことを心配していたら、この状況は、悪や災いとしか思えなかったことでしょう。裁判の結果は、良くて釈放、悪ければ、刑罰が待っていたからです。皆さん、あなたなら、そのような状況に置かれて積極的になれるか？でも、すでに見て来たように、パウロは、主の御名のため、主を証するためにエルサレムに来たのです。彼の中では、すでに死をも覚悟できていました。ですから、何とかして主を証する道を彼は探るのです。

この続きは、また次週になります。でも、いかがですか？このように国の指導者たちの前に立たされることは、当然、緊張や恐れに伴うことだと思います。でも、それを主イエスを証する機会と捉えるなら、これほど

のチャンスはなかなかないのではないのでしょうか？願ったら、必ず誰にでも与えられる、というものではありません。しかも、この時のパウロは、ローマ市民として、さっきまでは危うくむち打ちを受けるところでしたが、今度は、その反対に千人隊長たちに守られる立場にあったのです。これもまたすべてをご存知で、主がご自身の御名を知らせるために、パウロをエルサレムへと導かれた理由といえます。

主イエスが、私たちクリスチャン、つまり、主に愛され、主の御霊を受けた者たちに願っておられること、それは、それぞれが自分の置かれたところ、また自分に与えられたものを用いて、主を証することです。そのなされた証に対して、それを聞く人がどう応答するかは私たちにはわかりません。でも、それを用いて主が人々をご自分へと近づけられることを信じ、主を証し続けるなら、私たちは主の真実さとその栄光を見るのです。たとえ、それがこの世でなくとも、私たちはやがての日、天の御国においてそれを知ることになります。

ですから、パウロのように、主を証することで、ギリギリのところを通ることはあるのです。人々から馬鹿にされ、陰口を言われ、距離を置かれたり、頭がおかしい人のように扱われたり、危害を加えられることもあると思います。でもその中で、主にあって忍耐し、祈りとみことばを通して日々主とともに歩み続けるなら、それが人々に対して主を証することとなります。つまり、主によって今置かれているところ、その生活の場ことが、私たちにとっての何よりの証の場です。そこでは、さまざまな予期せぬことが起こることでしょう。コントロール不能と思える時が多々あるでしょう。その中で、私たちは罪の問題や自分の弱さに気づかされ、嘆き、悲しみ、痛むことがあります。でも、そのような中でも、主イエスは証されるのです。いや、そのような中でこそ、主のすばらしさ、その力強さは豊かに現わされます。

Ⅱコリ 12:7-10「また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。9 しかし、主は、『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである』と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです」。

キリストの力におおわれること、それはあなたの願いですか？主の力によって強い者となること、それはあなたの望みですか？私たちは、自分の問題や弱さに気づかされ、低くされる時にこそ、主の御力によっておおわれることで、最も強くなることができるのです。でも、誰も自分の間違いや弱さを認めることはしたくありません。そこが問題です。私たちはプライドの高い、自己中心な者だからです。でもだからこそ、主イエスがへりくだって下さいました。神であられる方が、そのあり方を捨てて、仕える者となり、私たちのため、実に罪人のために十字架にかかり、ご自身のいのちをその代価として明け渡して下さったのです。

主が十字架にかかれた時、パウロはそこにいませんでした。でもその彼が、まるで十字架にかかるようにして、なわめと苦しみの待つエルサレムに自ら向かったのは、その主の十字架の死を、彼自身のためのものとして受け止めていたからです。その主の愛と恵みによって、彼が満たされていたからです。いかがですか？今日あなたの心は、神の御子が、あなたのために苦しみ、十字架の死を遂げて下さった、という事実によって十分満たされていますか？その苦しみ、その死が、自分のものであった、と心から告白するほどに、あなたは自分の罪深さ、弱さに気づかされていますか？私たちが主イエスを証するのは、私たちのため十字架にかかり、そして、よみがえられた主を誇りとするゆえです。主と主の救いのすばらしさを知っているからです。あなたはその人ですか？

願わくは、みことばと聖霊を通して、主ご自身が私たちにそのことをわからせて下さいますように。そのようにして、私たちを救いの喜び、主イエスを知っていることの喜びで満たし、それゆえに、いつでも、どこでも主イエスを証する者として造り変え、用いて下さいますようにと祈り願います。